

市民活動を通じて被災地域に 構築される新たな災害文化

Formed New Disaster-Subculture from the Activity of Citizen Groups
around the Flooded Area

廣内大助

HIROUCHI Daisuke

- ①はじめに
- ②水害に関わる災害文化とその現状
- ③災害を忘れた都市住民
- ④川に親しみながら災害に向き合う市民の取り組み
- ⑤水害被害を軽減するために創出すべき新たな災害文化
- ⑥おわりに

【論文要旨】

災害の被災地域では、災害の痕跡を保存することがよく行われている。これは災害の教訓を後世に伝え、再び同じ被害を繰り返さないためのものである。しかしこのことが地域の防災力をどのくらい向上させているのか考えると、非常に効果があると単純には言い難い。濃尾平野の輪中地域に代表されるように、本来災害にあわないために地域ぐるみでの工夫や仕組みが災害文化として存在した。これを受け継ぐことで、地域の防災力を維持してきたのである。水害リスクの低下と、コミュニティの崩壊によって、災害文化が受け継がれなくなった都市住民が災害に遭わないためには、現代の生活に合った新たな災害文化を創出し、受け継いでいく必要がある。河川流域を舞台に活動する市民団体の取り組みをヒントに、新たな災害文化の可能性について考えてみる。

【キーワード】 災害文化、輪中、水害、市民活動、天白川